

元 氣 の 源 通 信	特定社会保険労務士・経営士 深川順次 福岡市東区香椎4-11-17-201 TEL 092-661-0552 FAX 092-661-0582
人事労務・社会保険等手続き・助成金・給与計算	
(今月の言葉)	
① 好きこそものの上りなれ ② 石の上にも10年 ③ 逆境こそが人・会社を強くする	

2009年10月号(第87号)

「やはり野球が好きだから」前人未達の9年連続200本安打を達成したときのイチロー選手の言葉です。

ご存知のように、イチロー選手は今までも数々の偉業を達成してきました。日本では7年連続首位打者(1994~2000年)。2001年メジャーに移籍。その年には新人最多安打記録233本を上回る242本を打ち、新人王とア・リーグMVPを獲得しています。また2004年には262安打と量産し、かつて誰も破ることができなかったジョージ・シスラーが持つ年間最多安打記録257本を84年ぶりに書き換えました。そして今年の偉業です。

イチロー選手はどうして次々と偉業を成し遂げることができるのか。その一端に触れながら、学んでいきたいと思ひます。

好きが最大のモチベーション

好きこそものの上りなれ

『これでいいや』ってならない最大の理由は、僕の場合は、**野球が好きだから**(イチロー)

数々の偉業を成し遂げ、しかも一生暮らしても余りある財力を持ちながらもなお「野球をうまくやりたい」という気持ちを持ち続けているイチロー。それは「野球が好きだから」というのです。

イチローが、3歳のときにお父さんから買ってもらったのがおもちゃのバットとボールでした。「うれしくてうれしくて」片時も離さず、持ち歩いたといひます。これがイチロー選手と大好きな野球との出会いでしたが、幼心に芽生えた好きで楽しいという気持ちをメジャー選手となった今日も持ち続けているということ。『**大好きだからもっとうまくやりたい**』これが偉業を成し遂げる最大の要因であることは間違いないと思ひます。

もちろんイチローも人の子です。「野球に行きたくない」というときが少なからずあるといひます。そのときは「仕事だからしょうがない」と言い聞かせるそうです。

それはともかくとしまして、やはり「好きなことを仕事にできる」人は幸せものですね。しかも「**好きこそものの上りなれ**」が成功の最大の要因です。このことをイチローはもの見事に表現しています。

しかし、イチローのように「好きなことを仕事にできている」人は、ごく一部かもしれません。若者の間では「好きなこと」探しが増えているといひます。そのたびに転職する。しかしなかなか見つからない。しかも生活は親に寄生する。いわゆるパラサイトシングルです。

しかしこれでは本末転倒です。やはり仕事とはなによりも「**生活の糧を得る**」ものだと思ひます。自立して生活する、あるいは結婚して家族をつくっていくためのものです。この一社会人としての最低限の責任を果たすことが仕事をする＝働くことではないでしょうか。そして目の前の仕事に本気で取り組み自らを成長させようとするれば、仕事の大切さもわかり自ずと好きになるのではないかと思ひます。何よりも「**目の前の仕事を好きになろう**」とすることです。

この「生活」と「成長」を保障するものこそが会社であり、職場に他なりません。「生活」と「成長」

を保障すればするほど、従業員は仕事が好きになり、会社が好きになるのではないのでしょうか。そして「好き」が最大のモチベーションとなり、業績向上に貢献してくれると思います。

石の上にも 10 年

「僕の夢は一流のプロ野球の選手になることです。そのためには、中学、高校と全国大会に出て活躍しなければなりません。活躍できるようになるためには練習が必要です。僕は 3 才のときから練習を始めています。3 才から 7 才までは半年ぐらいやっていましたが、3 年生のときから今までは 365 日中 360 日は、激しい練習をしています。・・・そんなに練習をやっているのだから、必ずプロ野球の選手になれると思います」

これはイチローの小学 6 年生のときの作文です。

イチローは、幼いときから文字通り「練習の虫」になり、自らの夢を実現したのです。イチローもバットを振る作業自体は面白くないといいます。しかし、試合でヒット 1 本打ってファンに喜んでもらううれしさ、それはなにもものにも変えがたいといいます。「ヒット 1 本打つのに、どれだけの時間を費やしているか」「ヒットの 1 本がどれだけうれしいか。・・・飛び上がるぐらいにうれしいんですよ」

こうして、イチローは本格的に練習を始めた小学 3 年生から練習に、練習を重ね、ほぼ 10 年かけて、ついに最初の首位打者になりました。

この 10 年が、一角の仕事ができるようになるのかの分かれ道だと思います。これは個人でも会社でもいえるのではないのでしょうか。「石の上に 3 年」といいますが、3 年では腰掛け程度。どんな仕事でも本格的に打ち込んで 10 年、これで初めて一角の仕事ができるようになるのではないかと思います。このことは、「会社がプロ社員を育てるには、10 年かかる」ということでもあります。まさに「石の上にも 10 年」。このことをイチローの軌跡が物語っています。

逆境こそ人・会社を強くする

「苦悩を通じての歓喜」これはフランスの大作家ロマン・ロランの作品『ベートーベンの生涯』にある言葉です。モーツァルトはすらすらと曲を書き上げる天才。これに比してベートーベンは思索に思索を重ねて曲を紡ぎだしていったと言われています。まさに努力の人。イチローのことを思うとき、この「ベートーベン」の「苦悩を通じての歓喜」を思い出します。

イチローも言っています。「自分は幸せな人間だと思う。不幸な人って、何事もなんの苦労もなくできてしまう人でしょう。でも、それでは克服する喜びがなくなってしまふ」

イチローの中にある「困難を克服する喜び」「逆境を克服して自らが成長する喜び」こそが、野球史上数々の偉業を達成できた最大の資質ではないかと思います。

困難や逆境への心構えについてイチローが端的に示してくれています。自ら（会社）が成長するチャンスだと受け止めよう、その克服の過程（プロセス）にこそ成長の喜びがあると。

またイチローは次のようにも言っています。「どんなに苦しいときでも、あきらめようとする自分はいなかったし、あきらめる自分もいなかった。そのときのベストを尽くそうという自分がいたこと、それはとても心強いことでした」—どんなに苦しいときもあきらめなくてベストを尽くす。その結果には拘泥しない。意識化するはそのプロセスだということです。結果はどうであれ、プロセスに焦点を当て続け、全力を尽くす。ここに成功の要因があるとイチローは言っているのです。

現在、中小企業は一部を除き逆境の只中にあります。特に下請けの製造業は仕事が半減しています。生き残りのために、融資や助成金を利用したり、賃下げや人員整理を断行せざるを得ないところも出ています。ただそれはあくまでも目先の施策です。やはり長期的にみれば、元請に左右されない技を磨き、商品や販路をつくりあげることではないのでしょうか。逆境こそそのチャンスです。